

## ■指導行政のポイント

### “革新幻想”に惑わされた戦後教育

菱村 幸彦

久しぶりに知的興奮を覚える本に出会った。竹内洋教授が著した『革新幻想の戦後史』（中央公論新社）である。今回は、その本を紹介しよう。

#### ノンフィクションを読む面白さ

著者は、京都大学名誉教授で現在は関西大学に勤める著名な教育社会学者である。竹内氏には、『立身出世主義—近代日本のロマンと欲望』『日本の近代(12) 学歴貴族の栄光と挫折』『競争の社会学—学歴と昇進』『立志・苦学・出世—受験生の社会史』『丸山眞男の時代—大学・知識人・ジャーナリズム』など多数の著作があるので、すでにおなじみの方も多と思う。

いずれの著作もアカデミズムに基づく研究所産であるが、随所にエピソードが盛り込まれており、巧みなノンフィクションを読む面白さがある。

『革新幻想の戦後史』は、例えば、キャンパスの左傾化をリードした岩波雑誌『世界』、東大系進歩的教育学者による学会の支配、共産党教員主導による京都旭丘中学事件、小田実・ベ平運につながる全共闘闘争、草の根革新幻想としての石坂洋次郎の時代——等々について、丹念に資料にあたって、戦後の「革新幻想」がどのように醸成されたかを実証的に解明している。

私が特に関心をもって読んだのは、第3章の「進歩的教育学者たち」である。旧文部省に勤務していたとき、ことごと文教施策を敵視し、反対闘争をおおる東大教育学部の進歩的教育学者の言動に不快感と不信感を抱いた。その学者たちが教育学会や教育界にどのようにして支配体制を築いてきたかが具体的に描かれていて興味深かったのだ。

なかでも、宗像誠也教授については、同教授が唱えた内的外的峻別論が家永裁判や学テ裁判など多くの教育裁判で、行政当局を攻撃する理論として援用

されたこともあって、注目して読んだ。

本書で同教授が東大教育学部のボスとして、大学の教官人事を牛耳り、自己を教育研究の総本山と豪語した話などを知って、なるほどと腑に落ちる思いがした。

それと関連する話で、『教職研修』誌でおなじみの市川昭午氏が、宗像教育行政学を批判したというので、宗像一派から隠微に排斥され、大学での集中講義の招聘まで妨害されるエピソードが紹介されている。このボスにして、このエビゴーネンあり、と言うべきか。

#### 不毛で無益な争いに駆り立てた

第4章の「旭丘中学校事件」も見逃せない。旭丘中学校事件は、戦後の偏向教育の典型事例として有名であり、拙著『戦後教育はなぜ紛糾したか』（教育開発研究所・刊）でも取り上げているが、竹内教授の記述は詳細でビビッドである。

例えば、中学生たちが校長をつるし上げ、「おい！おっさん早く書かんか」と罵倒しながら辞表を書かせる場面など、文革時の紅衛兵さながらで、改めて事件の異常さを思う。

左翼イデオロギーを喧伝した進歩的文化人の罪については、元朝日新聞記者の稲垣武氏が著した『「悪魔払い」の戦後史—進歩的文化人の言論と責任』（文藝春秋）に詳しいが、本書は、対象を教育界に絞っているだけに、教育関係者には一段と興味深い読み物となっている。

戦後、進歩的教育学者が教育界を支配し、社会主義体制をめざす改革こそが日本をよくする道という幻想を振りまき、それが戦後教育を不毛で無益な争いに駆り立てた。その実相を、本書は明らかにしている。

（ひしむら・ゆきひこ＝（財）学習リソース情報研究所 理事長）

## ●好評発売中！

東日本大震災後の学校防災と学校の危機管理諸問題への対応！

### 《管理職演習》学校防災・危機管理の最新法律問題

菱村 幸彦(国立教育政策研究所名誉所員)【編】

A5判 270頁／定価 2320円

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、無料FAX 0120-462-488 をご利用ください（24時間受付・即日発送）